

① 宮城県女川町／おんまえや 佐藤広樹さん

# 震災で生まれた、買い物難民100名を 小回りの利く軽トラが救った



軽トラに肉、野菜、果物などを積んでの移動販売。お客さんとの会話も弾む

高齢化率の高さや湾の入り組んだ地形から、買い物難民の多さが問題となっていた女川町。町の中心街にあった食品スーパー・おんまえやは、20年以上マイクロバスによる移動販売を手掛けてきたが、津波で店舗を失ってからは商工会の支援で軽トラでの販売活動に注力。店舗の復興が見通せないなか、軽トラは町民のライフラインになり、店にとってもお客さんとの関係をつなぐ重要なツールになっている。

東日本大震災で甚大な被害を受けた自治体のひとつが女川町。中心街は海に向かって開けていたため、津波ですべてが流れてしまった。現在は更地となって、再開発の計画が進められている。

そこには観光施設のマリンパル女川のほか、商店が多く立ち並んでいた。ひととき大きな店舗を構えていたのがスーパーのおんまえやだ。そのルーツは大正時代にさかのぼる。中心街から少し離れた

御前湾で漁師に麦を売り、米も扱う米穀店となった。1981年に町の中心街へ移り、約200坪の店舗を構える、女川町でもっとも大きな総合食品スーパーとして、町民の台所的存在となった。

女川町は入り組んだ無数の湾に沿って、集落が点在している。まとまった商業地は中心街しかなく、高台や海辺の集落に住んでいる人がまとまった買い物をするには、マイカーか町営のデマンドバ

女川はサンマ漁が有名で、漁獲高は本州一といわれる。毎年9月の「おながわ秋刀魚収穫祭」は震災後も行われ、サンマの炭火焼きなどがふるまわれた。昨年は大月みやこ、堀内孝雄、徳光和夫などが出演した。

ス（現在は運休）を利用するしかなかった。しかし約1万人の人口に占める高齢者の割合は4割超。震災前から、買い物難民と呼ばれる町民が多数存在していた。そのため、おんまえやでは1986年から移動販売を行っていた。マイクروبাসで、かなり広い範囲を巡回。店舗に足を運べない過疎地の高齢者に重宝されてきたという。

店舗は津波で流されたが、マイクروبাসは難を逃れた。震災後から約2ヵ月後の5月6日には移動販売を再開。しかし女川町やその周辺には、マイクروبাসでは入り込めない集落も多い。とりわけ困難に直面したのが、中心街の周辺の高台に暮らす、震災前は店舗を利用していた住民たちだ。唯一の



食品スーパーがなくなつたいま、買い物に出掛けるとなると、車で約30分かけて隣の石巻市まで行く必要がある。しかし車を流されてしまつたり、高齢で足腰が弱っている住民も多く、日常の買い物もままならないのが現状だ。

震災で新たに発生した買い物難民に対応すべく、おんまえやはその年8月に女川町商工会から軽トラを貸与された。いままでのマイクروبাসではとても走れなかつた高台の狭い路地も、軽トラなら入ることができる。駐車スペースも

わずかで済むので、お客さんの玄関口に横付けすることも可能だ。営業パターンはお昼前から夕方にかけて、1日15〜20ヵ所を巡回するのがふつう。品揃えは肉や野

菜、果物、牛乳や卵、豆腐といった生鮮食品が中心だ。

助手席に積んだスピーカーから音楽を流すと、たちまち近くの住民が財布を持ってやってくる。ドライバーと常連さんは「寒くなりましたね」「今日はお肉、何があるの?」といったものに会話を交わす。その様子だけを見ていると、ここが被災地であることを忘れてしまいそうだ。

## 住民の台所だった店舗が失われたいま 軽トラが常連客との絆を深める

店舗が流され、移動販売のみになつたおんまえやだが、マイクروبাসが残っていたことで立ち直りも早かつた。代表取締役の佐藤広樹さん（31）は震災時、そのマイクروبাসに乗っていて難を逃れた。

「新しい車両に換えることになつて、石巻市を走っていたんです。大きな津波被害を受けた日本製紙



狭い道でも、わずかなスペースでも、どこでも開店できる

の工場のあたりを走っていたときに地震が来て、これは大変だと女川へ引き返しました」

30分ほどかかって女川へ到着すると、町はずっかり津波の下に沈んでいた。自分の店も見当たらない。水際まで下りようとしたが、すでに津波が近づいており、警官に止められた。当時おんまえやの

佐藤さんは「女川水産加工研究会」のメンバーでもある。地元の水産加工業者の2代目、3代目による集まりで、佐藤さんは流通の立場で参加。この研究会では商品開発だけではなく女川の将来を考えている。

社長を務めていた母と、常務だった姉、自宅にいた祖父母とも連絡がとれない。佐藤さんは津波に沈んだ町を高台から眺めることしかできなかった。

その様子を、商工会館の屋上の給水タンクにしがみつきながら目

## 愛する故郷・女川で再起するぞ 地元で営業できる日をめざして

母と姉、祖父母は津波の犠牲となつてしまつたが、幼なじみでもある従業員が、海に流されながらも奇跡的に生還。かすかな希望を感じた。店舗はなくなつてしまつたが、多くの町民が店舗の代わりとして頼つてくれていたマイクロバスも残っている。落ち込んでいた場合ではない。そう感じた佐藤さんは、自衛隊員や残つた従業員とともに必死でがれきを運び出した。そして震災からわずか2ヵ月で移動販売を再開した。

「以前からマイクロバスで巡回していた場所に関しては、震災前に戻つたと感じました。しかし今まで店舗を利用していたお客さん

撃していた女川町商工会の青山貴博経営指導員は生々しく語る。

「おんまえやさんの屋根には、たくさんの人が登っていきましました。でもあつという間に水位が上がつて、みんな津波のなかに消えてしまつた」

をどうしようかと、頭を悩ませていました。顔なじみのおじいちゃん、おばあちゃんがとても不自由をしている。そこに軽トラを貸してもらふことになつたのです」

女川町は高齢化が進み、震災前はやつとの思いで店まで来て、商品を抱えてまた一生懸命戻つていくというお年寄りも多かつた。

「軽トラはお客さんのご自宅前まで行くことができます。巡回先には昔からの常連さんも多く、ここまで来てくれてありがとうと感謝される。そうした声をいただく、私たちも励みになります」

会長だった祖父、社長の母が亡くなつたおんまえやは、佐藤さんが5代目を継ぐことになつた。

佐藤家ではスーパーとともに、20年ほど前から旅館・海泉閣を経営していた。薬湯と海鮮料理が自慢で、観光客はもちろん、地元でも宴会などに利用されていた人気の宿だ。海泉閣は津波被害を逃れ、震災後5ヵ月ほどは数百人の住民が避難所として生活していた。いまは復興に携わる工事関係者などが利用する。料理自慢の宿なので厨房は立派な設備を備えている

が、いまはそれを持って余し気味だ。せつかくの設備を遊ばせておくのもつたいたいと、宿泊を受け付ける一方で、厨房を使って弁当の製造も始めた。店は古くなつて使つていなかつたマイクロバスだ。

震災後さらに2つの旅館を開業し、現在3館が営業している。女川町は震災後、住居や仕事を求めてかなりの人口が町外に流出した。10年、20年かけて復旧しても、



女性の雇用機会を増やしたいと佐藤さん



このままでは確実に町は廃れてしまふ。事業を拡大し、女川を出ていった人が戻って働ける機会を作りたい。それが佐藤さんの考えだ。

「女川の基幹産業は漁業でした。男性は漁に出て、女性は陸で加工に携わっていた。男性はまた漁に出られるし、復興工事の仕事があります。ところが震災で加工場がやられ、女性は働き口が本場にならない。だからできるだけ、雇用を創出したいと思っています」

震災前の従業員はおんまえやと海泉閣合わせて約30名。それがいまは約40名と、店舗が失われたのに増えているのだ。経営は苦しいが採算度外視で事業を広げている。佐藤さんは「つぶれない程度に、自分ができることをやっているだけ」と笑う。31歳にして、上は中学生から下は0歳まで4児のパパ。震災後は姉の子供も引き取り、5人の子供を育てている。

「仮設住宅で僕と妻、子供5人の7人暮らしですからしんどいですね。上の子はいもうすぐ高校受験。早く新しい自宅を建てて、妻と子供に楽をさせてあげたいですね」



開店のメロディが流れると近所の人たちが集まってくる。多くの住民がおんまえやの軽トラを心待ちにしている



経営的にはまだまだ厳しいが、お客さんの感謝が支えになっている

## 自力でできることを できる人がやる

いつか以前のように中心街でスーパーを再建したいと佐藤さんはいう。現状ではいつになるのか、元の場所で営業できるのか、想像もできない。それまでは移動販売で粘り強く営業していく覚悟だ。

「店舗を構えるには土地も大型什器も必要で、期間限定の仮設店舗というのは難しい。実際こちらからお客さんへ足を運ぶ方が効率がいい。住民が不自由を強いられるので、モノを売る側にはそのぶん機動力が求められていると思います。そうやってお客さんを確保しておけば、いつか復興したときもやっていけるかなと思います」

別れ際、佐藤さんは「できる人ができることをやれば、なんとかなるはずですから」とつぶやいた。女川が復興したとき、佐藤さんのような若い経営者が町の中核を担うことになる。そのときにはひとつひとつの取り組みが実を結び、住民にも観光客にも魅力のある女川が甦ることだろう。